

令和6年度 自己評価書

学校園名 附属世田谷小学校

1 学校経営計画 別紙のとおり。

2 自己評価

領 域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評 価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	- 子どもが安心して集える学校を目指して組織的に活動する。特に児童の言動や人間関係を日常的に観察して、よりよく整えられるように努める。 - 児童は、「思いゆたかに 考えふかく とともに生きる子」を目標に、他者との適切な人間関係を持てて、自分のすべきことができて、周りのことも酌み取れて、を目指したい。 - 教員は、互いに尊重し合い、”チーム世小”との意識で協働的に仕事に取り組むよう努める。	「子どもが安心して集える学校を目指して組織的に活動する。特に児童の言動や人間関係を日常的に観察してよりよく整えられるように努める。」を重点課題とした。 その中で、「他者との適切な人間関係を持てて、自分のすべきことができて、周りのことも酌み取れる」児童の育成を目指した。 Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での生活が3年目となった。 Homeの活動においては、3年間の活動を通して、異学年で日常の学校生活することが当たり前となり、自然に思いやりの気持ちを持ったかわり方ができるようになってきていると感じることができた。 入学の会、全校遠足や宿泊活動、スポーツフェスティバル、Homeフェスティバル、卒業の会などの行事は「Home」を活動の中心として、年間を通して活動を積み重ねている。その中で、宿泊行事でのハイキングで上級生が下級生を思いやって手を引いて一緒に歩く姿や、下校途中でバスが事故に遭遇し途中で運転打ち切りとなった時に上級生が下級生の家の近くまで送り届ける等の姿が見られている。Homeでのかわりを通して、「他を思いやる」姿、成長した姿を見ることができ、Homeでの活動の成果を実感することができた。 - 児童一人一人に寄り添う学校の基本姿勢は教育活動全般で概ね実現できた。 今年度は昨年度の成果を土台にして、さらなる教育相談体制の充実を目標に進めてきた。個別対応に必要な子どもについての情報を教育相談部で集約、教職員で共	C	- 児童理解の重要性への再認識を図ることと保護者との意思疎通を丁寧に行うことを継続して行っていく。 今年度も教育相談体制の充実を図ってきたが、さらなる充実に努める。予防的対応・早期対応を心がけ、組織的な相談対応に努める。また、必要に応じ外部機関との連携も学校システムとして積極的に図っていく。 特に特別な支援が必要な子どもに対しては、保護者との面談・個別支援計画作成など連携を積極的に行い、外部機関との連携を深めていく。 - 学びに向かう心、向上心や好奇心や探求心の育成は本校の教育モットーであるが、今年度も重点にしてきた、やさしさ、おもいやり等の心を育てるための手だてを工夫し、より一層の充実に努めていく。 さらに、いじめ等の諸問題への対応として、複数教員での子どもの見取り、情報共有を強化し、未然防止を重点に取り組んでいく。	- 保護者や地域と連携した危機管理体制をさらに充実させること。 - Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程で、3年が経過した。3つの活動領域が互恵的かつ有益に機能していることについて、考察し、より一層の教育課程の充実に努めていく。 また、その成果については社会に積極的に発信していく。

		有、組織的対応という一連の対応が機能し、定着している。さらに、3つの活動領域での教育課程を編成しているために、一人の子どもに対して、「Home担当」「Class担当」「Laboratory担当」と必然的に複数の教員がかかわることにより、一人ひとりの子どものよさ、問題点、気になること等をより多くの目から見とることができている。現在の体制では、その子にかかわっている全教員で情報共有し、必要に応じて教育相談部、管理職もかわり、組織的に対応することが必然的に行われることを実感することができた。この点も一つの成果であると感じている。 - 校務分掌を改編し、原則、一人一役としての3年目であり、教員の校務の平準化を目指してきた。Home担当、Laboratory担当、Class担当等も兼ね合わせて、校務の平準を図ってきた。継続してさらなる平準化を目指していきたい。 - 情報の公开发信のためのホームページの整備を進めている。 発育調査に向けての学校説明会はオンライン開催とし、多くの方に視聴していただき、本校の教育について広く公開する一助となったものと思われる。公示に関してもホームページ上と正門で行っているが、次年度はホームページ上のみとしていきたい。 - 定期的な安全点検で施設面等の安全管理はできた。 - 保護者アンケートの実施等、学校評価情報の集約に努力している。		- 施設を含めた学習環境の整備に努めること。また、今後エアコンの更新、校庭の整備など、高額であり、経年劣化が明らかな施設設備に関しては、計画的に必要な経費の貯えを行い、整備に努めていく。 - 会議については、対面での会議とし、事前に「提案資料配布」「文書での意見交換」「意見を受けての修正案」の過程を踏み、会議の時間短縮を図るとともに、全教員が共通理解のもと学校運営に携わっていききたい。 - 教員の働き方改革、業務量の軽減のために、学校経費による常勤教員採用が可能となるよう大学と交渉を続けていく。	
教育活動	◎ 学びを自分でデザインする子の育成。 - 発達段階に応じて学びを自分でデザインできる子どもを育てる。 ◎ 上記のような学びの発生する場をデザインする。 - 児童が自らの学びをデザインすることを誘発する場、カリキュラム、相互作用を設計し、実	教育活動は、一昨年度より、Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での活動となった。 3年生のLaboratoryでは、探究の仕方などを学び、4～6年生のLaboratoryでは、一人ひとりが計画した課題に基づき、自分で学びをデザインし、探究的に学びを進める姿が多く見られた。これまでの活動の記録まとめ、児童が過去のLaboratoryの活動にアクセスできる環境を整備したり、パブラボの機会を設定したりすることで、他の子の探究の様子を知り、自分の探究活動の幅が広がるような環境整備や機会も設定した。持続可能な探求活	C	Homeを主体とした学校行事について系統的に育てていくようなカリキュラムをより一層充実していく。 その方策として、次年度もHomeを活動単位として行事を編成する。入学の会をHomeでお迎えすることをはじめとして、1学期中頃に全校遠足、夏休みに宿泊活動、2学期中頃にはスポ	Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程の実際の様子を授業参観や行事を通して保護者に参観していただき、加えて保護者会等でも子どもの活動の様子をお伝えし、学校の教育活

	験し、知見を共有する。	動としていけるよう努めていきたい。 ・ 運動会をスポーツフェスティバルへと移行し、活動主体も学級からHomeへと移行して3年目を迎えた。勝ち負けだけに固執せず、当日を迎えるまでの過程を重視し、友達とともに運動する楽しさを味わい、生涯スポーツにつながるような活動となり、定着してきている手ごたえを感じている。この趣旨を学校通信等でもお知らせし、保護者にも理解してもらえるように努めた。 ・ 宿泊行事についても、活動主体が学年からHomeへと移行し、異学年での活動となって3年目を迎えた。各Homeで活動内容を計画するなど、Homeで活動をデザインする活動も定着してきた。 日常の学校生活でのHomeの活動で培った、思いやりの気持ちを持ったかかわり方をしている児童の姿が多く見られるようになり、Home活動の積み重ねの成果を感じている。 ・ 児童の育成方針や子どもの育ちに関する知識・情報を保護者と共有することに努めた。また、学校通信等での伝達、低学年保護者会での講話・解説の試みを始めた。 ・ 児童の個別指導、進学指導において、可能な限り保護者と直接話し合う機会を持ち相互理解に努めるようにした。 ・ 個別の案件に関しては教育相談システムを活用しながら迅速で丁寧な対応を心がけた。必要な場合には、管理職との面談の機会を設定し、保護者の思いを受け止めながら対応を進めてきた。今後も組織的対応に努める。 ・ 今年度もスクールカウンセラーを2名配置することができた。	ーツフェスティバル、後半にはHomeフェスティバル、そして一年の集大成として卒業の会を計画するという一連の活動を次年度も継続していく。 この年間通じてのHomeでの活動を通して、異学年でお互いを尊重しながら生活をデザインし、異質共存、公共性を継続して育んでいきたいと考えている。 さらに、Homeで育んだ異質共存、公共性をClass、Laboratoryなど、学校生活の他の場面でも発揮できるようにしていきたいと考えている。 ・ 教員と保護者は子どもを育てる両輪であり連携は必須。その関係性の分断は即問題となるので、普段からの良好な関係づくりに配慮する。 対面での保護者会、授業参観の機会を設定し、保護者との意思の疎通に努めていきたい。 ・ 大学との連携として、SSWの活用、特別支援教育に関わる体制整備が年々進んでいることは評価できる。指導側の人的保障と保護者に理解・協力を得ることに継続的に取り組みたい。今後も支援員の配置は不可欠であり、人材確保を含め大学と協働していきたい。 ・ 進学進路指導は附属中学校の理解のもとに円滑な連携を図れているが、さらなる相互理解・	動について保護者の理解を深めていきたい。 そして成果を実際の子どもの姿で見いただき、課題については、改善を図っていく。
--	--------------------	---	---	---

				連携により小中一貫教育のよさを確かにしていきたい。	
研究活動	文部科学省研究開発学校の指定を受け実施した『「学びを自分でデザインする子ども」を育む教育課程の創造』のまとめを踏まえて、一般校で応用可能なかたちに適応させることを模索するため、教育課程特例校として引き続き、教科担当制 Class と Home、Laboratory での教育を展開し、その課題と成果について、実践に即して知見をまとめ、公表できるよう努める。	「『学びを自分でデザインする子ども』を育む教育課程の創造」～Laboratory、Home、Class における学習環境デザイン～を研究主題とし、文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、研究開発学校の指定を受けていない学校でも実施可能な教育課程としていくことをめざしてきた。 今年度は、3つの活動領域の教育課程について研究の成果と課題をまとめ、1月18日には研究発表会を開催した。参観者約450名あまりをお迎えし、研究の成果を発表することができた。	C	- 研究開発学校が昨年度で終了し、今年度からは、教育課程特例校を受けて実施しているので引き続き、Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程を、研究開発学校の指定を受けていない学校でも実施可能な教育課程として整備し、継続して実践をつみ重ねていきたい。 - 教員の力量形成については、日常的な授業研究、自主研修を通して、一層の改善を求めている。 - 地域の拠点校を目指すための取り組みとして世田谷教育委員会や東京都との研究上での連携強化を図りたい。 - 発信力を高める意味で研究内容をHPで公開するなど、周知の方法を工夫する。	- 実際にHomeの活動を3年間実践し、子どもたちの他人の思いを酌み取りながら行動する姿や優しい姿などを見取ることができ、Homeでの活動の成果を感じ、理解も進んできているという実感は保護者のアンケートからも確認できる。 一方で、同年齢でのClassでの子どもたちのトラブルも散見される。 Homeでの素敵な姿が他の場面でも発揮されるよう、研究を進めていく。 - Laboratoryの活動では外部の人材活用なども積極的に取り入れ、活性化を図っていきたい。同窓会の方との連携も図っていく。
学生の教育・支援活動	- 学部教育実習、教職員大学生実習、学外者教育実習などを積極的に行う。 - 教育実習において、実習生の精神的支援に心がける。	- 本学学部より必修実習176名、選択実習11名を受け入れ実習は順調に進み、計画通りにおこなうことができた。 - 女子栄養大学短期大学部より栄養士実習2名を受け入れ実習は順調に進み、計画通りにおこなうことができた。 2024. 5. 14 日体大学生（タイからの留学生）	C	Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程の中で、より充実した実習となるよう、見直しを継続的に行い、方法を工夫していく。	特になし

		授業参観10名 2024.5.22 本学教職大学院生 授業参観 6名 2024.6.24 本学学生 授業参観 1名 2024.11.1 都留文科大学学生 授業参観 1名 2024.12.6 桐蔭横浜大学学生 卒論指導 1名 2025.2.27 桐蔭横浜大学学生 授業参観 5名 2025.3.6 本学学生 授業参観 4名		実習生への個別対応に関して大学と連携した共同指導体制が整備されたことで丁寧な指導ができるようになってきているので、今後も維持したい。	
社会貢献活動	○ 現職者研修、研究セミナーなどを積極的に行い、知識・技能の共有に努める。	- 対面での現職教員研修会を実施。 2024.7.13 参加者 約100名 2024.8.19 参加者 約40名 2024.12.21 参加者 約50名 2025.2.22 参加者 約40名 2025.3.29 参加者 約50名 - 教育視察の受け入れを実施。 2024.5.10 新潟より 1名 2024.6.12 長野より 1名 2024.9.12 世田谷区内より 1名 2024.10.3 カンボジアより 40名 2024.10.11 カンボジアより 10名 2024.11.11 世田谷区内より 1名 2024.12.13 世田谷区内より 1名 2025.1.23 鹿児島より 2名 2025.1.29 石川より 5名 2025.2.6 韓国より 5名 2025.2.17～20 岡山 他より 5名 2025.3.4 板橋区より 2名 2025.3.11 大阪 他より 5名、板橋区より 1名 2025.3.13 鹿児島より 1名	C	- 学校参観や研究訪問については可能な限り受け入れ、Laboratory、Home、Classの3つの活動領域による教育課程の成果を、子どもの姿を通して発信していきたい。 - 社会貢献としてまた自己研修の場として今後も「現職研修会」を継続していく。東京都や世田谷区と連携をしながら、より広く、充実した研修会にするよう努めていく。	特になし

3 その他特記事項

- 今年度は、Home、Class、Laboratoryの3つの活動領域での教育課程3年目であり、重点的に取り組んできた。
 Homeを活動単位として実施した宿泊行事、スポーツフェスティバルは、一昨年度、昨年度の実践をもとに、今年度の計画を立てることができた。子どもも教員も見通しをもって取り組むことができたと感じている。
 今年度の成果を基に、次年度、さらにブラッシュアップしていく。

4 自己評価委員会委員，開催日

附属世田谷小学校自己点検評価委員会
委員長 及川 研 (校長)
副委員長 越 後 佳 宏 (副校長)
委 員 齊 藤 豊 (主幹)
委 員 松 本 大 介 (主幹)
委 員 河 野 広 和 (研究部長)
委 員 長 坂 祐 哉 (生活安全部長)
令和7年3月24日 (月)

〔記載要領〕

1 学校経営計画

当該年度の学校経営計画を添付する。

2 自己評価

(1) 「重点目標・具体的取組」には、学校経営計画の重点目標と、重点目標を達成するための具体的取組（評価項目）を記載し、具体的取組の達成状況を把握するための指標を、具体的取組ごとに可能な限り設定する。

(2) 「達成状況・成果と課題」には、具体的取組ごとに設定した指標に照らし合わせて、取組みの状況とその達成状況を記載した上、成果と課題を記載する。また、保護者等を対象としたアンケートや保護者等との懇談会等を実施した場合は、その状況や結果について記載する。

(3) 「評価」には、附属学校の学校評価に関する実施要項に定める次の評価基準に基づき、A、B、C、D、Eの5段階の評語を付す。

評語	評 価	達成度
A	重点目標が十分達成されており、極めて優れた成果を上げている。	100～90%
B	重点目標が十分達されている。	89～80%
C	重点目標が概ね達成されている。	79～70%
D	重点目標が最低限達成されている。	69～60%
E	重点目標が達成されていない。	59%以下

(4) 「今後の改善方策」には、挙げられた課題をどのように改善していくのか、その改善方策を記載する。

(5) 「学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策」には、自己評価の結果に基づきとりまとめた今後の改善方策（上記（4））を、学校関係者評価の結果を踏まえ見直した場合は、それを記載する。見直しがない場合には「特になし。」と記載する。

3 その他特記事項

重点目標以外の目標で、特に成果があったもの等があれば記載する。

4 自己評価委員会委員、開催日

自己評価委員会の委員と開催日を記載する。

5 その他

自己評価の進め方については、文部科学省作成の「学校評価ガイドライン」を参考にすること。